

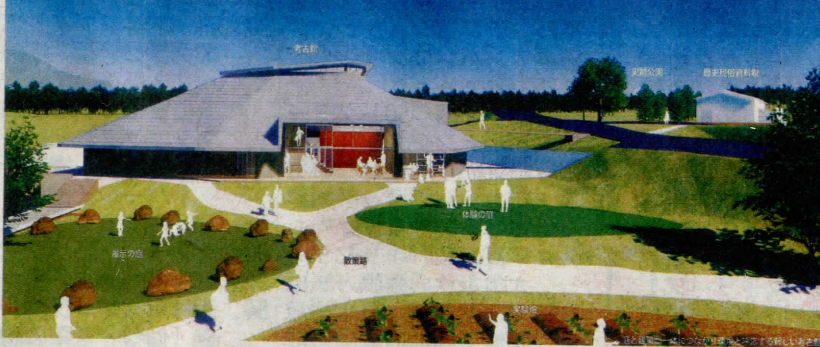
外観は「竪穴式住居」

基本設計業務担う事業者決定

2029年度開館目指す 新井戸尻考古館

富士見町は17日、2029年度の開館を目指す新井戸尻考古館の基本設計業務を担う事業者が、松本市の設計事務所アーキディアックに決まったと発表した。建物の外観は縄文時代の竪穴式住居をモチーフにしたデザイン。今後ワークショップを開き、建物の一部設計に地元住民の意見を取り入れる計画だ。（佐々木孝彦）

時をめぐる井戸尻文化の大屋根
人・もの・情報・体験が駆動するフィールド・ミュージアム



現段階での新井戸尻考古館の外観イメージ（アーキディアック提供）

町によると、コンセプトは「縄文時代の知恵を現代に生かしたデザインと機能」で、大屋根の下の開放的な空間が計画する。建物横の道路に通じる通路を

屋内外で一体的に利用できる体験工房と軒下テラスは、学習活動や体験イベントでの使い勝手の良さを考慮した。また、眺望がよい南側には野外体験活動ができるスペースや野外展示場、実験畑などを計画。西側に配置する駐車場は普通車40台、大型バス3台分のスペースを確保する。総事業費は約10億円。

用地は現在の考古館から南西へ約150メートル離れた農地。今後、設計を経て2027年度の着工を予定する。文化財を保管する考古館は、建物のコンクリートに含まれる揮発性有機化合物を分散させる期間が必要になることから開館を29年度と見込んでいる。

設計会社選定は8月26日、6社によるプロポーザル（企画立案）方式で実施。審査員

9人が遺跡の保護、研究、学習などの審査基準で選んだ。